

町小だより

令和6年
10月25日
No. 690
御免町小学校

個性は豊かに

校長 相澤 祐助

急に冷え込み、11月のような朝でしたが、町小絵画展が10月20日（日）に開催されました。凜と引き締まった空気の中、私は全校絵画集会の中で次のような話をしました。「絵を描くということは生きること、人生と同じです。真っ白なキャンバスに何を描こうかと悩み、描くものを決め、画材や色を選びながら描き進めていく。まさに、日々の私たちの生活そのものと言えます。何を描くかは自分が決めます。出来栄は各自に委ねられ、自分の個性がキャンバスに表現されます。一つ違うのは、人の命は有限ですが、絵は永遠に残ります。生きた証にもなります。今日は、その生きている姿、個性の塊をファミリー班（異学年グループ）でじっくり鑑賞しましょう。一つ一つの絵にはその人の個性、すばらしさが輝いています。よく見て、言葉で伝えましょう」

先月の末に、大山のぶ代さんが御逝去されたという報に接し、私は大きなショックを受けました。私が1999年に赴任し、勤務していたモスクワ日本人学校をのび太の声優である小原乃梨子さんと大山さんが訪問されていたからです。当時のモスクワ日本人学校の児童生徒に大山さんはこんな話をしてくださいました。

「私は小さい頃、本当によくしゃべる女の子でした。いつまでもしゃべっているのも母は、『静かにしないとおやつ抜きだよ』と言ったくらいです。でも、中学生になった時、クラスの子が、『大山がしゃべったら、声の真似をしよう』という陰の約束をしていたようです。私が話をすると、誰かが、教室のどこかで、私の特徴ある声を真似するのです。つまりからかいが始まったのです。それから私は、だんだんしゃべらなくなっていきました。それを見て変に感じた母が『どうしたの？』と私のつらさに気づいてくれたので話をしました。すると母は『声を変だからといって、その弱みをかばってばかりいたら、もっと弱くなってしまふよ。もっと声を出すようなクラブに入ってみたら』と私を奮起させてくれたのです。その後、私は放送委員会に入り、演劇部に入り、今は声優として『ドラえもん』をやらせてもらっています。母の言葉、個性を生かすというアドバイスがあったから、前向きに生きる今の私があります」

大山さんは自分のコンプレックスを母の励ましで乗り越えられたと語ってくれましたが、私はそもそも、人の個性を笑いものにしたり、見下したりするという行為をする人が許せません。「そんなつもりはなかった」「ちょっとした冗談」そんなもので済まされたいと思いません。個性は豊かなもの、笑いものではないのです。

絵画展での鑑賞の様子を見ていたら、「〇〇さんのサンゴ礁がとってもきれい」「アサガオの花がとっても大きくてきれい」という感想が聞こえてきました。ファミリー班という異学年の中で交わされた意見交流が、さらに全校に伝わることを願っています。絵画展にお越しいただいた地域や保護者の皆様方、本当にありがとうございました。